



常照

佛教大学附属図書館報

2017

NO. 64



佛教大学附属図書館



はじまりはロンドン

附属図書館長・仏教学部教授
松田 和信

学会発表のため、今年は毎月のように海外に出ている。五月がオランダのライデン大学、六月がソウルの高麗大学、七月が中国杭州の浙江大学、八月がカナダのトロント大学であった。今月末には雲南省の大理でも研究発表の予定が入っている。さらに学期末までにバンコク、オースロ、ミュンヘンに調査や打ち合わせで行く予定もある。チケットも安いし、ネットもあるし、以前に較べて海外に出ることに今やほとんど抵抗感がない。誰も同じであろう。

私の研究対象は古代インドの仏教文献である。インド仏教の研究者は圧倒的に海外が多い。彼等との付き合いは欠かせない。研究室に籠もっているだけで文献が向うからやつて来るわけでもない。私が研究で初めて海外に出たのは一九八六年の秋であった。東京の東洋文庫の調査チームに加えてもらって、特別に借りた大英図書館（日本の国会図書館にあたる）の一室で一箇月を過ごした。スティーヴンが蒐集した中央アジアのサンスクリット語写本を調べるためであった。大英図書館といっても、私たちが行ったのはインド関連の書物と資料を収める分館のインド省図書館の方であった。当時のイギリスはIRAのテロ問題を抱えていた。ウォーターロー駅近くの分館のビルは国防

省の一部も入っているとかで、入口には自動小銃を構えた兵士が立っていた。私はそこで初めて海外の空気に触れたように思う。その後、図書館はセントパンクラス駅横の壮麗な新築ビルに移転して、各部門はそこに集められた。無料で見学できる広いギャラリーも併設している。数年後、巨大な地下書庫を案内してもらった時、日本書コーナーに「のらくろ全集」が並んでいたのを今でもはつきり覚えている。大英博物館にミイラを見に行くのもよいが、ロンドンを訪れたらぜひ大英図書館のギャラリーにも寄って欲しい。マグナカルタやベートーベンの自筆楽譜は興味深い。しかし、イギリスの至宝はそれではない。「抱きしめたい」や「イエスタデイ」の歌詞をボールマッカードニーとジョン・レノンが殴り書きたホテルの便箋がそれである。ギャフリーストップにレプリカも売っている。一番のロンドン土産だと思おう。

ロンドンから始まって、ライデン大学の二年間、さらにノルウェーやドイツなど、未知の仏教文献を求めて、私はずっとひとつの旅を続けてきたのかもしれない。多くの研究者に出会い、友人を得る旅でもあった。何か目的があったわけでもない。気がついたらそこにいただけである。人生という旅にさして目的がないのと同じであろう。



2017 NO. 64

目次

はじまりはロンドン

附属図書館長・仏教学部教授 松田和信

1

図書館はホルモン？ 佛教大学と基礎医学の「絆」

保健医療技術学部理学療法学科教授 河田光博

2

所蔵資料紹介

京都西陣吉田甚兵衛家文書 ―中沢道二書状を中心に―

図書館専門職員 尾下仁美

6

誰にも邪魔されない至福の空間

教育学部教育学科准教授 平田豊誠

12

図書館活用法 仏教辞典の使い方

仏教学部仏教学科教授 松永知海

16

「情報」の収集と発信 ―資料の新規購入と蔵書構築―

図書館専門員 志麻克史

20

佛教大学附属図書館の事業活動報告 2016～2017年度前半期

24

佛教大学附属図書館の沿革と「成徳常照館」の由来

25



二条キャンパス図書室

図書館はホルモン？ 佛教大学と基礎医学の「絆」

保健医療技術学部理学療法学科教授 河田 光博

大学の「顔」は学長と図書館である。学長がどのような人物か、学長が大学の長として大学をどのような想いとエネルギーで率先垂範しようとしているのか、まさに身体の中の「顔」であり、品格、知性、教養、人望、指導力のすべてが学長の「顔」に集約される。それは、23種類からなる表情筋の単なる組み合わせで作り出せるものではない、深い年輪が刻まれた芸術品でもある。

図書館も大学という組織、建物の「顔」である。重厚な正門ではなく、図書館こそが、その大学が歩んできた歴史、積み上げられた知的財産を堂々と示し、研究と教育の総合力を示すバロメーターである。図書館はレポートを書く空間的場所でもあるが、感性を育み、静かに構想を練り、窓から外界に広がる景色を脳の栄養物の一つにしながら、人類が過去に成し遂げてきた膨大な書物、文献と対峙できる場所

だ。身体や精神様態の表情を露顕させる最高学府の「顔」である。入り口の雰囲気、装飾物、カウンター受付係りの何気ない応対が、「顔」の表情を明るくも暗くもすることは言うまでもない。

私は京都府立医科大学を1977年（昭和52年）に卒業以来、基礎医学、とくにヒトの身体を扱う解剖学、また生体機能を作り上げるホルモンと脳の関係を調べる神経内分泌学という領域で生きてきた一

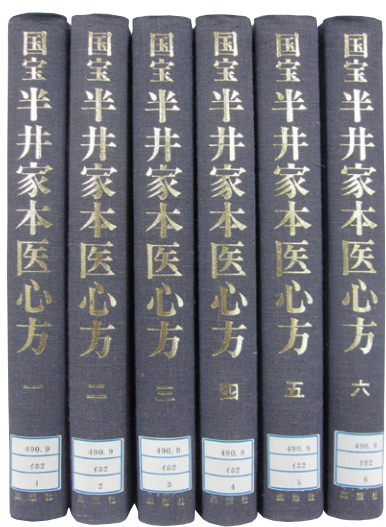
介の研究者である。縁あって2015年（平成27年）から、この佛教大学に奉職することとなった。その第一日目の4月1日に、常照ホールで田中典彦学長から辞令をいただき、新たな人生の道を歩み始めた。当日の午後、二条キャンパスでの会合まで時間が多少あったので、図書館を地下から4階までワクワクしながら歩いて廻った。今まで接してきた領域とは大きく異なる蔵書の種類の多様さ、4階の四庫全書の威圧感、地下2階のおそろくは日本一であろう数々の古い漢籍が直接手にできる喜び、まるで向学心に燃えて入学した新人生のように、心に大きな感動を覚えたことが記憶に新しい。そして、佛教大学の二つの「顔」に安堵した。

私が今まで多くの時間を費やして目にしてきた書物は、医学関係のものが主流であった。もちろん、その専門性から生命科学、理学、獣医学、農学、水産学、工学、生物・物理・化学関係もあった。医学の歴史を扱う医史学が専門ではない私であるが、4月のある日に、佛教大学紫野キャンパスの図書館の2階の奥まった書棚に「医心方」を見いだしたときの驚きは今も忘れない。古い伝統と歴史を有する医科系の大学でもない佛教大学の図書館に、日本最古の医学書が整然と並んでいた。「医心方」は丹波康頼が平安時代の982年に、当時我が国に伝来していた中国（隋唐）の医書200数部をもとに編纂した、いわば日本の医書のバイブルである。

私たちはあまり意識しないが、日本の国は学問に對する理解が他国に比べて優れており、儒学、史学、文学などの各分野においても素晴らしい発展を遂げ、貴族層を中心に日本文化の進展に大きく貢献した歴

史を持つ。とくに我が国の学問の特色の一つは、元奈良国立博物館館長の山本信吉氏によれば、よしも悪

しきも学問の世襲化であった。例えば、儒学は清原・中原氏、史学・漢文学は大江・菅原・藤原南家、暦学は賀茂氏、天文学は阿部氏、算道は三善・小槻氏、法律（明法）は坂上・中原氏といった特定の「家」が、その学問を「家」の学問として世襲、独占することとなった。このような学問の在り方は医学でも同じであり、平安時代後期には丹波氏と和氣清麻呂の一族である和氣氏が朝廷の侍医となったことも相まって、医学をその家業として世襲していったのである。その後、和氣氏は半井と姓を改め、名門医家として継続することとなった。現存する医心方には、国宝として有名な仁和寺蔵の「医心方仁和寺本」、出所が定かでない「医心方延慶本」、さらに上記二つと異なり、完全に脱落などがない全30巻冊子本1冊が完璧にそろった国宝「半井家本医心方」がある。少し説明が長くなったが、この「半井家本医心方」が、佛教大学の図書館に復刻版ではあるが全巻完備されて

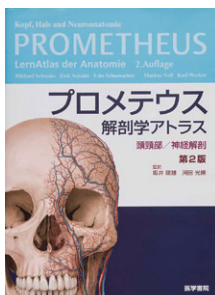
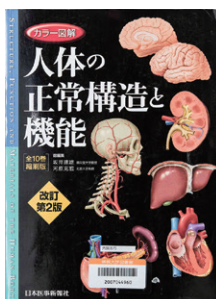


いることは、医学関係者ならずも驚愕に値する。ここに佛教大学の懐の深さ、学問に対する真摯な姿を垣間みる。さすがであり、佛教大学の矜持を物語る。私はオキシトシンの研究のために、1985年から87年までアメリカのニューヨークにあるロックフェラー大学で研究に勤しんだ。オキシトシンとは、脳の一部に下垂体というところがあり、その後葉の部分から分泌されるホルモンである。母親が胎児を分娩するときに子宮を収縮させたり、母親の乳腺に働きかけてミルクを出させる作用を持つ。近年、オキシトシンは母と子の愛しい関係、人他者との交友・社会関係、さらには人と飼いだなどのペットとの信頼関係を形成する、いわゆる「絆」ホルモンとして大変注目されている。その医療への応用として、自閉症の治療にも用いられつつある。当時30代前半の若い私は、オキシトシンホルモンを作る細胞を分子レベルで可視化しようと、最先端の技術を開発すべくまさに格闘していた。どうすればオキシトシンだけ顕微鏡でとらえることができるのか、悶々たる日々が続いた。そのときよく利用したのがロックフェラー大学の図書館であった。ロックフェラー大学は旧ロックフェラー研究所として設立され、マンハッタンの北東部の閑静な地にあつて、大きな総合大学ではないが、生命科学系の大学院大学として世界をリードし、ノーベル賞学者を輩出し続けている名門大学である。日本人には野口英世が研究をしていた馴染みのある大学であるが、その野口英世の胸像が正面にある図書館で、マンハッタン島の横を流れるイーストリバーを見ながら、オキシトシンのメッセンジャーRNA（遺伝子の転写産物）を何とか顕微鏡でとらえたいと必

死にもがいていた。最新の文献を読み漁っても答えは出てこない、書庫に並ぶ古い本のページをめくっても自分の期待に添えてくれるヒントはでてこなかったが、喧噪のマンハッタンにあつて、ロックフェラー大学の不思議なくらい静謐な図書館はいつも思索の場所でもあり、研究意欲をじわりじわりと駆り立ててくれるエネルギー供給所でもあった。図書館機能として大事なものは、なにも最新情報を提供するだけではなく、鋭敏な感性というか、何か「ひらめき」を与えてくれる場所が図書館なのだ。野口英世博士のご加護のおかげか、EBSM ハイブリダイゼーション法という組織化学法の開発に成功し、脳の神経細胞にオキシトシンのメッセンジャーRNAを顕微鏡的にとらえることができた。その姿は美しく、しかも定量的に解析可能と言う、世界で誰もなしえなかった方法の開発に成功したので。

その甲斐あつてか、1988年にイギリスのエンジン

河田先生の著書



理学療法、作業療法、看護系の和雑誌や教科書はおそらくこの医療系の大学よりも充実しているのではないだろうか。なにより、保健医療技術学部学生の勉学熱心さは人一倍だ。しかも優秀である。土曜日や祝日、日曜日、それに夜も遅くまで開室しているので、学生はもとより仕事を終えた卒業生もやってきて、凜とした学びの空間の雰囲気は、学問の府であるというアカデミズムを強く意識させる。

医学関係者でもあまり知られていないが、二条キャンパスのすぐ近くには、日本医学史上極めて重要な史跡がある。それは三条商店街を少し南に下がった六角通りに面し、武信神社のすぐ近くに、日本で最初に解剖がなされた、いわば日本近代医学発祥の地と言える場所である。日本最初の解剖と言うと、江戸の小塚原での杉田玄白や前野良沢らの解体新書の話（1771年）を想起する人も多いだろう。神泉苑西通り六角のあたりは六角獄舎があり、処刑が多くなされていた。1754（宝暦4年）に、法眼の地位でもあった医師の山脇東洋は、官許のもと、屈嘉をはじめ14名の方々の罪人を学術的に解剖した。まさに英断である。杉田玄白の解剖よりも実に17年も早いことがその偉業の凄さを物語っている。当時は中国古来の五臓六腑説が世にもはやされていたのだが、山脇東洋は科学的精神にのっとり、実証主義的に解剖記録と解剖図を収めた「蔵志」を著したのであった。それ故に、この日本初の解剖は単なる医学史上だけの快挙ではなく、その後の日本の科学界に及ぼした影響は計り知れないとされる。自らの手で現象を確認し、考察するというエビデンスに基盤を置くサイエンスの基本がこの地で生まれたのだ。

バラ大学から招かれ、6カ月間、アメリカ英語とは異なるスコットランド英語の地で研究室を切り盛りできた。とにかく、Kawataが開発した方法をエンジンバラ大学に導入し、確立したいというのがエンジンバラ大学からの招へい理由であった。当時直属の指導していたケンブリッジ大学出身の才女バーバラ・サムナーという女性研究者が、子育てと保育所の関係で、午後から研究室にいないになるので、私は彼女が帰った一日の残りの時間を別のことに費やすことにした。それは解剖にまつわる悲劇ともいべき事件についての歴史的検証であった。医学教育において、ご遺体の解剖は必須であり、現在は献体 donation と言う優れたシステムのおかげで、亡くなられた方の身体を不自由なく解剖することができ。しかし、このような献体制度が確立されるには近代医学は大きな負の、痛ましい陰の部分を経験することとなる。詳しくはまたいずれ別の紙面で紹介したいと思うが、解剖体を合法的に用意できなかった1700年から1800年代のヨーロッパの医学校では、亡くなると墓を掘り返し盗掘しては、ご遺族の承諾もなしに他人のご遺体を解剖体に供するという、今では考えられない事態が横行していた。そして悲劇はさらに最大の悪事を生むこととなった。木賃宿を営むバークとヘアーは、アイルランドからの出稼ぎ人を次から次へと殺し、ご遺体をなんとエンジンバラの医学校の解剖学教授に売ったのである。この凄烈な事件はすぐに発覚し、二人は処刑、解剖学教授は永久追放となった。解剖学が専門であった私にとっては、英国では子供でも知っている事件を正確に調べ、日本ではほとんど知られていない史実を教訓としたいと思う、

解剖された方々を弔う供養碑は、山脇東洋のはからいで新京極三条下がった浄土宗西山深草派の誓願寺の墓地にある。保健医療技術学部の学生に対する4月初旬の最初の解剖学講義では、この二条キャンパスで解剖学を学ぶことができるのは何かの縁であり、しっかりとした歴史観で勉学に励んでほしいと、ゆとり世代の学生にやんわり「檄」をとばしている。

私にとってはこの歴史ある佛教大学で、今まで培った解剖学や神経内分泌学をどのような形で還元し、

エンジンバラ大学図書館や市立図書館にも足しげく通い、資料の収集に当たった。ちなみに、殺人犯の一人の遺骨は、何とエンジンバラ大学の解剖学実習室の前に、骨格標本として今でも展示されているのである。罪と罰の考え方がかくも異なり、西洋と東洋の厳しい身体感の違いを知ったのである。

欧米から帰国後、1990年に38歳という若さで京都府立医科大学の教授に就任したが、医学部の教授は多くの教員、大学院生を抱え、彼ら、彼女らの研究費を獲得する義務を背負わされている。私も一時は30人近くの研究員を指導する「大ボス」と化し、日夜、研究費の獲得に奔走し、大型プロジェクト、科研費、さまざまな諸経費を集めてはまた申請書、報告書を書くと言った毎日の連続だった。研究は日々新しいことが発見される訳ではない。これは理系も文系も同じであろう。研究生活には悶々となる日々の連続がつきものである。そんななか、小さな喜び、例えば、実験がうまくいったとか、論文が査読者からオーケーの返事が来て受理 accept されたとか、当時は掲載雑誌が出版されてその別刷り請求が著名な研究者から来たとか、そういう喜びは何ものにも代えがたかった。そして研究室で小さな酒盛りが始まったものだ。近年、大学構内でのアルコール飲酒は厳しくとがめられるようになってきているが、研究室にアルコールはつきもので、研究の苦労話も面白おかしく仲間と共有できるのは、ささやかな研究者の欲びのひと時でもあった。

私の所属する保健医療技術学部は二条にあり、その建物の7階に図書室がある。この図書室も使い勝手がすこぶる良く、新着本も多い。洋書は少ないが、

発展させて行くのか、試行錯誤を繰り返しながら進めていくことになる。人体解剖や分子レベルの実験は、「不殺生」の戒律とどう折り合いを付けて行くのか、なかなかの難題である。先日、紫野の礼拝堂落慶式の時に、はじめて手にした「水谷幸正先生と佛教大学」の本の一節に、「医学に基礎医学と臨床医学があるように、仏教にも基礎仏教学と臨床仏教学がある」というくだりに、浅学の私はいたく共感した。基礎があつてはじめて臨床がある―このことは医学と仏教というなかば異なる歴史をたどってきた学問であつても、普遍的であり、その両者の「絆」を深めるのがまさに佛教大学の図書館における知的活動なのではないだろうか。

ホルモンという言葉は、hormao というギリシャ語から由来したものであり、「刺激する」「興奮させる」という意味である。「顔」の表情を有する図書館は、いわばホルモンと同じように、私たちの脳とこころに、知性と感性に、絶えず刺激や興奮を与え、栄養を供給してくれる人類が内在的に持つ最高の知的創造物なのだろう。

かわたみつひろ
河田光博

保健医療技術学部 理学療法学科教授

1952年神戸市長田区生まれ。京都府立医科大学医学部医学科卒業。京都府立医科大学名誉教授、元日本解剖学会理事長、日本学術会議連携会員。研究分野は解剖学、神経内分泌学。著書に『プロメテウス解剖学アトラス頭部/神経解剖』（医学書院 2009）、『人体の正常構造と機能 VIII 神経系』（日本医事新報社 2017）論文に「Nurture: Effects of Intrauterine Position on Behaviour」(J. Neuroendocrinol 25,2013) などがある。

京都西陣吉田甚兵衛家文書の概要

本稿で紹介するのは、佛敎大学附属図書館所蔵の「京都西陣吉田甚兵衛家文書」である。京都西陣・千本五辻下ルの吉田甚兵衛は、吉文字屋の屋号で質屋を営む一方、十八世紀後半には今出川千本東入ルに作られた心学講舎「時習舎」の都講（講舎役員）としても活動した。

文書は全五一〇点で、その内容は質屋仲間関係心学関係が中心であり、元文二（一七三七）年から明治四十四（一九二一）年のものが残るが、江戸後期のものが中心を占める。

本文書に関連する文書群としては、『史料京都の歴史 第十六巻 伏見区』（平凡社、一九九一年）に紹介される「田中子朗氏所蔵文書」がある。同文書は田中氏の収集文書で、このうち二百点弱が吉田甚兵衛家を原蔵者とする史料であり、江戸時代後期から大正期までの証書類や心学明倫舎関係史料を含むが、本稿で紹介する吉田甚兵衛家文書と内容は重複しない。

当館所蔵の吉田甚兵衛家文書のうち、京都の質屋仲間に関する主要な史料は、竹下喜久男「近世京都質屋仲間」『鷹陵史学』第二十九号、二〇〇三年）にて既に翻刻・解説されている。従っ

て本稿では、心学関連の史料を紹介する。

中沢道二書状

吉田甚兵衛家文書に含まれる心学関係史料は、「会輔順講定」（講座での担当者を選めた文書）や門人名簿など時習舎の運営に関わる史料、心学を創始した石田梅岩や心学興隆につとめた手島堵庵の追善会に関する史料、『心学心得草』といった刷物など（ただし、これらの刷物は吉田家とは別の旧蔵者のものが混入した可能性がある）様々であるが、中でも目をひくのが寛政年間（一七八九―一八〇〇）に心学者中沢道二から吉田甚兵衛（吉田定誓）に宛てた書状である。

中沢道二（一七二五―一八〇三、義道、通称亀屋久兵衛）は京都に生まれ、手島堵庵のもとで心学を学んだ。安永八（一七七九）年には関東における教化のため江戸に下り、その後心学講舎・参前舎を設けた。石川謙「石門心学史の研究」（岩波書店、一九三八年）所収の「中澤道二及びその門人の教化活動の地域」によれば、その教化活動は江戸のみならず、関東から中国地方に至る広範囲に及んでいる。

吉田甚兵衛家文書の中の中沢道二書状は、全

本稿では紙幅の関係により、四点のみの紹介となった。中沢道二書状はもちろん、それ以外の史料も含め、本文書群の活用により日本史研究、思想史研究等がより一層深化することを期待したい。

史料翻刻

凡例

- 史料翻刻に際しては、次の方針に従った。
- 旧字体や変体仮名は通行字体に改めた。ただし、「江」、「与」、「而」、「者」、「茂」や、「*ろ*」は原文のままとした。
- 適宜読点や並列点を補った。
- 改行箇所は原文とは一致しない。

〔1〕（寛政七年）十月八日付 調査番号231

（包紙）

「千本五辻下

吉田甚兵衛様

参ル御人々御中

自江戸

無別条

「

一筆啓上仕候、先以時分柄冷氣二相成候、弥以貴公様始御家内様方御揃被成、玆重二奉存候、随而

四十三点で、うち二十点は卷子二巻に仕立てられている。さらに、卷子に収録されているもののうち十六点は石川謙『増補心学教化の本質並發達』（青史社、一九八二年、初版一九三二年）の「中澤道二書翰集」にて翻刻されている。宛先は吉田甚兵衛の他、時習舎都講中や近江屋又兵衛宛となっているものもある。

作成年代が推測できた書状は二十四点であるが、このうち最も古いものは寛政五（一七九三）年三月二十四日付で、前掲「中澤道二書翰集」の七番として掲載されるものである。最も新しいものは寛政十年七月七日付（本稿の「4」）である。従って年代が判明したものに限れば、寛政五年から同十年という短い期間に発信された書状が残っていることになる。

前掲『石門心学史の研究』所収の「中澤道二の活動年譜」によれば、この寛政五年から同十年までの間、道二は関東から畿内にかけての各地で道話をを行い、またその教化対象も町人だけではなく武士層にも及んでいる。

本稿でこれから紹介する書状も、道二の教化活動の一端を示すものとして興味深い内容をもつ。以下、本稿に掲載した中沢道二書状の内容を簡単に紹介する。

当地愚老始無別条罷在候間、乍憚御安意可被下候然ハ此度御書状被下忝拜見仕候所、ふし事委細仰被下、先々安心仕大悦二奉存候、扨々御多用之中二ていろく〱と御心遣被下、御影二て首尾よく埒明安心仕、忝奉存候、御礼筆紙二尽かたく、愚妻方も宜敷御礼申上候様二申付候、御家内様方江茂宜敷御挨拶可被下候、先々愚筆以御礼申上度、如是御座候、恐惶謹言

十月八日

中沢道二

吉田甚兵衛様

二啓仕候、上河先生御内室様、先月廿一日御死去之由、仰被下、おとろき入候、扨々御気毒千万二奉存候、早速御悔状出シ申候、其外江戸四舍都講中、御屋敷様方茂追々御悔状出シ申候間、左様二思召可被下候

一広瀬玄養老二茂無事二て当月二日二首尾能出府被致、段々様子承り候所、白川公之思召扨々難有御取はからひ奉恐入候、夫故御領分請宜敷、人氣茂和ぎ、御役人様方厚き御悦ひ二て江戸御屋敷方も私方へ御挨拶被下、難有仕合二奉存候、玄養老、先月十二日二白川領出立被致候、跡二て町々村々御領分中る追々来年玄養老被参候様、御役人様方へ御願ひ二出申候事、白川社中る書状二て申参り候、是のミ難有事二御座候、誠二古先生方之御仁徳、時節到来仕、大悦至極仕候、難有事二奉存候、玄養老る先生方へ近日二書状参

〔2〕も寛政七年のものと推測される。最初に道二の娘の縁談について書かれている。次に道二の上京の希望が述べられ、江戸城本丸奥女中が京都の石田梅岩・手島堵庵の墓所を訪れた旨が報告されている。最後に、「1」と同様池田庄蔵の道話について言及がある。前掲『石門心学史の研究』には、本史料と同日に発信された浅井祐敬宛の中沢道二書状が掲載されているが、それでも池田庄蔵の江戸での様子が述べられている（四七一ページ）。

〔3〕は寛政八年のものと推測される。上河淇水の丹波亀山・篠山での、また久世友輔の但馬出石・関宮での教化活動について報告されている。さらに、道二の上京について、「江戸社中一統」の同意が得られていない旨が述べられている。

〔4〕は寛政十年のものと推測される。おそらく同日付の中元に対する礼状（時習舎御都講中宛、調査番号226）の追伸部分と考えられる。本史料では上野国や甲斐国での教化活動の様子が、現地の人々のエピソードを交えながら綴られている。なお、書状の受取人である吉田甚兵衛（定誓）は、この年の九月に死去している。

り候間、御らん可被下候

一去年年丑ノ秋方大坂天満の社中池田庄藏殿と申御人、江戸表へ御修行ニ御出被成、当秋方道話被致候所、人柄宜敷、社中一統請宜敷、都講方道話印かん相渡、所々日々道話被致、此間方御屋敷様方御頼ニて所々御屋敷方請宜敷、大悦仕候、此池田庄藏殿事只今ニてハ剃髪被致、寛月と申候、会輔の節咄合仕候所、道理もすみやかニ御座候、行じやうも宜敷、社中一統大悦仕候間、上河先生江戸御序手之節仰上可被下候、以上

〔2〕(寛政七年) 十二月二十八日付 調査番号 237

(包紙)

二本

吉田甚兵衛様 中沢道二

人々御中 無事

自江戸

」

猶々御家内様方宜敷御伝達可被下候、愚妻方も宜敷申上候様に申付候

一筆啓上仕候、時分柄寒気甚敷御座候、弥以貴公様始御家内様方御揃被遊、珍重之御儀奉存候、随而愚老始皆無別条罷在候間、乍憚御安意思召可被下候、然者御忌明之御書状被下、扱々御叮嚀之御挨拶痛入奉存候、おせい様ニ茂其後ハ御心さむ敷

思召候と奉察候間、宜敷御挨拶可被下候、天命ハのかれぬ物にて御座候、天子様、將軍様でも相不叶、其外世間にハ様々の哀敷事共御座候間、よくく御あきらめか大事ニて御座候

一ふし事、段々の御世話ニて首尾よく埒明被下、扱々安心仕候、是二付、白木屋清兵衛・ふし縁段の義、是にハ大キ間違御座候、去冬清兵衛・ふし事二付一言私へ申候事御座候、あまり深切なる心ていと存、京都江申シ遣シ候ハ、私の大キ不調法、此義ハ清兵衛の心の尽にもなり申間敷候、店表世間茂有之候段ハ身分相応の縁段か宜敷候、私ハ少茂願ひ望無御座候、私の望ハむしろの上でも土間の上でも唯家内中よく和合の外ハ無御座候、財ハ末也、徳ハ本也、唯道の外二宝ハ無御座候間、左様に思召、相応の事あらば宜敷御世話奉頼上候

一近又様の承り候段ハ、先頃北野の角屋にて上御社中会合被成て、取々御座候よし、大悦ニ奉存候、其故貴公様方藏御普請の御祝義として御酒被遣にきく敷事と承り、大悦仕候、只今にてハ貴公様御老人にて御苦勞千万ニ奉存候、又々命も御座候ハ、近年の内二上京仕候て、又々御世話二なり、時習舎にて道話致シ、何卒にきく敷社中の出来候様に致シ度存候、江戸表ハ御屋敷様方御社中・町家社中、日追てにきく敷繁昌仕候に付、唯古京の事思出く、是も天命万事宜敷御世話奉頼上候

〔3〕(寛政八年) 五月二十八日付 調査番号 176

(包紙)

「吉田甚兵衛様

中沢道二

参ル人々御中

從江戸参前舍

」

一筆啓上仕候、時分柄次第向ニ暑候所、弥貴公様始御家内中御揃被遊、珍重之御儀奉存候、随而当地愚老始無別条罷在候間、乍憚御安意易思召可被下候、然者、四月九日出御状被下、忝拝見仕候所ニ、其御地之義委細仰被下、忝奉存候

一白木屋清兵衛事、卯月十四日、日柄宜敷婚礼首尾能相整候よし仰被下、千万忝奉存候、此うへ共下京江御出之節ハ、御立寄被下、御懇御頼上候

一上河先生様、当三月十一日方丹州亀山・笹山江御下向御座候所、殊外御繁昌由仰被下大悦至極ニ奉存候間、御序節宜敷上河様江御挨拶可被下候、御頼上候

一久世友輔様、明倫舎ニ而御道話御座候所、夥敷聴衆御繁昌よし仰被下、扱々大悦仕候、夫方但馬出石・関宮迄御出被成、殊外御繁昌由仰被下、扱々難有キ御事ニ御座候、誠ニ石田先生様・手嶋先生様之御信徳時節到来仕り、大悦至極ニ奉存候

一三文字屋五兵衛・娘市両人方御伝言御深切ニ委

一当秋八月十五日御出立、御本丸奥御女中様、閑院宮様の御姫宮様御向に御上京被遊候、京御滞留の節、御召遣ひの御女中方御揃、鳥辺山古先生のはか所江御参詣被成、石田様の杓の葉、堵庵様はか所のもみし葉を江戸みやけに被成、御社中の女中方へ被進、浅井平右衛門殿御内室おきよ殿江も被進、殊外大悦被致、扱々奇特千万なる事ニて、古先生の御信徳時節到来と難有事と奉存候

一去年年丑の秋方大坂天満の社中池田正藏殿と申仁、江戸表へ修行ニ被参候得共、京都の印かなく、大坂都講の添状もなく、夫故当秋迄見合居候所、是迄大坂天満ニて筆道を商工ふんに被致候人故、人柄もよく、大坂表にて少も不埒の筋無御座事、外方承り、夫故参前舍ニて道話被致候、愚老始社中一統承り候所、へんよく道理至極分り、甚道話達者御座候て、只今にてハれきく御屋敷方、御組屋敷其外方、日々諸方道話被致候所、甚請宜敷、扱々よき人か出来、大悦至極ニ奉存候間、御序手の節上河様へ仰上可被下候申上度事山々候得共、又々春永ニ申上候、先ハ御見舞御礼旁々如是御座候、恐惶謹言

十一月廿八日

中沢道二

吉田甚兵衛様

二啓仕候、御町内△^(山形屋)かたや自休様其外御社中様方へ出序の節、乍憚宜敷御伝へ可被下候

細仰被下、承知仕候、万事御世話被下千万忝奉存候

一当春北山金閣寺、東山清水、其外所々之開帳仰被下、今宮地築二付西陣町々々様々細工物拵、地車二而引、賑々敷事委敷忝存候、珍敷事ニ御座候

一秋ハ上京之義仰被下、扱此義ニ付江戸社中一統ニ不得心ニて、色々申分致し候得共、唯不機嫌困入申候、然共秋ハ早々上京致し度存候間、左様ニ思召可被下候、其節緩々申上候与楽罷在候間、御社中様方江茂宜敷御伝達可被下候、先ハ御礼申上度早々如是御座候、恐惶謹言

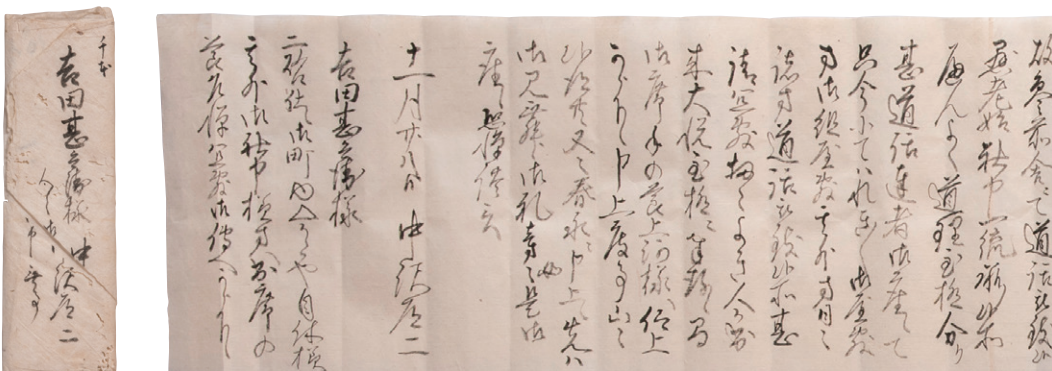
五月廿八日

中沢道二

吉田甚兵衛様

追啓仕候、御家内様方江宜敷仰上被下候、愚妻方も宜敷御挨拶申上候様申付候間、左様思召可被下候

一上河様、明倫舎都講様方へ乍存御見舞書状も得遣し不申候間、御序節宜敷御挨拶可被下候、御奉頼上候



(寛政7年) 11月28日付 中沢道二書状

追啓仕候、御存之私其上日々道話ニ諸方江参り、殊外多用ニ取紛、無抛以代筆中元之御祝儀申上候間、此段眞平御用捨可被下候、然者六月五日出貴札被下、忝拝見仕候、仰之通り御歴々之御役人様方御頼ニて上州表江二月方参り、上州表六万石領分廻村仕り、夫方甲府表近藤淡路守様御頼ニて御城内於御役所、十二日之間朝五ツ半時方九ツ時迄勤番衆様方・其外与力衆・同心衆斗、昼九ツ半時方七ツ時迄御城下町中江男女共志々者罷出聞候様御触廻シ被遊、聴衆千四百人方段々御座候、世話ハ町方社中江被為仰、扱々賑々敷事ニ御座候、甲府御城下青木町、丸屋七左衛門娘おやゑ廿四才、六年以前田中村大黒屋伝兵衛与申酒問屋嫁付候所、六年此方姑与不合ニて三度迄離縁ニて里本江歸り、当春三月二六才女子・当春正月出産之女子二人之子供連歸り居候所、両親ハ無御座、兄七左衛門兄弟、其外親類寄合色々いさめ候得共、二度歸所存無御座候与申、兄七左衛門殿因人居候所ニ親類方すゝめにて初おやゑ道話承り、目をさまし、我非をよく知り、扱々今迄女之道を知らず大きく心へ違致、面目次第茂無御座候間、何卒夫姑江宜敷佗言被成被下候ハ、一日なり共はやく歸り、女之道を急度相慎守候与申ければ、兄七左衛門初、親類大きにかん心致、早速兄七左衛門田中村大黒屋

伝兵衛方参り、右之様子申、佗言致候へハ、姑初夫ハ不及申ニ、大き悦、早速其日に歸り候て、互に和合致候事、其事村中評判ニて、村役中申合、石和御代官所江何卒村中之者江道話承り度候間、一日なり共御出被下候ハ、難有奉存候与願出候得ハ、御代官平右衛門様、嫁おやゑ義御聞被成、甚御かん心ニて此方ニて五日之間之道話之内、一日其方江遣し候とて、夫方御代官之御差図に任せ田中村参候所、則大黒屋本家新右衛門殿大家ニ付、此宿ニて道話勤候所、右之姑嫁其外家内不残被参、道話承り、かん心被致候、私茂大黒屋方へ悦び参り候所、家内和合致、扱々目出度事ニ御座候、然所ニ此村ニ公事出入御座候所、公事之相手道話承り角を折、相手之方方誤り候へハ、互に熟談致、済状差上、早々石和御役人様御礼に参り候

一上州勢田郡苗ヶ嶋村に、当春方村役人給米之事に付公事おこり、及騒動に、岩鼻宿に逗留致、岩鼻御代官所日々之公事出入甚六ヶ敷公事、然所ニ岩鼻宿観音寺ニて七日之間道話勤候所、公事人双方九人、日々道話承り、双方共角を折、互に熟談致、済状差上候所、御代官所吉川栄左衛門様大きに御悦ニて、双方者江御褒美之御言葉ニ預り、難有り不思議之因縁ニて、右之公事人九人之内方心学會得相済、殊外大悦被致候

一玠敷事御座候、甲州山梨郡中村百性吉左衛門養子清右衛門与申仁、当年四十三才、大酒を致喧

嘩を好、尺八を吹近村を廻り、喧嘩を致、大きく心へ違之者、併博奕ハ致不申候、然所六年以前、甲府方御頼ニて道話ニ参り候節、右清右衛門道話前訓承り、甚かん心仕り、早速私旅宿参り、大せい社中之前ニて、扱々今迄ハ大心へ違を致、大切之親之心に背き、不孝を致候、今日方改可申候与涙をなかし、暫泣入候、至極かん心之様子に相見へ申候、然所五年此方之孝行之依徳ニ孝子となり、去冬村役人中方右清右衛門殿孝心之義御代官所江訴出候所、御代官様方段々御吟味之上、江戸表方褒美被為下候、清右衛門殿江銀七枚、八十五才之母江一生志人扶持被為下候、難有御事ニ候、御代官川崎平右衛門様当春御巡見之節、貧家之清右衛門方御立寄被成、親子之様子扱々殊勝成事に候与私江委敷御咄御座候、世間之孝子ハ何生なから、此清右衛門殿ハ過て改ての孝子、誠に玠敷人にて御座候、過て改めれば改めらる物にて御座候、舜何人ぞとハ此人之事かと存候、此外色々利益御座候得共、筆紙難尽候

一此間本多弾正様江暑氣見舞参上仕候節、御用人様ニ承り候得者、此間上州岩鼻御役所吉川栄左衛門様方上州表利益書委敷被成、本多樣江差上被成候、扱々難有御事ニ御座候

一植松和助殿、甲州石和御代官川崎平右衛門様御頼にて、御支配領八万石領分廻村被致候、此外追々御頼御座候て、江戸表去年八月廿三日方出

立被致、今ニ歸府不被致候、此和助殿此度甲府ニて前講被致候道話ハ至おほこ成道話ニ候へ共、至極深切に御座候て、社中一統二名ハ不申、菩薩くくと申候、常々の行状ハ則菩薩行、我身の事ハ少茂不思、只人の為ニ深切のミ、夫上諸人はになびき、志立會得相済候人、去年之九月当年四月迄七百八十人余出来仕候、御代官所方御支配所村々江之御触書御目ニかけ申候

一藤堂土佐守様之御領分、貧家之百性ニ、大田善兵衛与申入至輕き奉公ニ召抱られ、江戸御屋敷勤居候処、九年以前方参前舎ニ而心学被致、至信心之人にて御座候処、三年以前在所表甚困窮に付、御隙を願在所歸り、百性被致居候所、此人小細工上手にて印籠之ねつけ杯よく被致候所、此細工評判になり、土佐守様御隠居様之御耳に達、去冬方御屋敷江被召、御長屋被下、細工物仰被付候所、至こまかい細工ゆへ、日の内斗細工被致、夜分ハ隙ゆへ同輩の衆集り四方山の咄シ致遊候所、彼仁道好之事なれば、不思議らす心学咄シ出候所、人々面白かり、夫方段々評判宜敷、正月十日之夜初御家中様召れ、道話被致候所、評判宜敷、追々御家中江召れ、御用人御家老様迄茂被参、ついにハ御上之御間に達、正月十七日に御隠居様被為召、御前ニて道話被致、時節逆不思議成事ニ御座候、所之庄屋殿江参りても上り口ニ腰かける事もならぬ身分之人か、御殿様之御前ニて道話被致候事、扱々不思議成事ニ御座

候、則善兵衛殿方参り候書状則日記書御覧ニ入候、此義幸久世友輔様江よく頼遣し置候間、左様思召可被下候、古先生様方之御仁徳、時節到来、扱々難有事共に御座候、此外難有事色々御座候へ共、筆紙難尽候間、当秋九月頃ハ北条玄養様上京被成候、其節委細之事御聞可被下候

一此状貴公様初時習舎御都講御覧之上、吉井利兵衛様初、明倫舎御都講様御覧入被下、其上近又様、白木屋清兵衛江茂御見せ被下候様、此義乍御世話御頼上候、吉井様・上原又兵衛様江茂別紙上度候へ共、此状一通ニ甚困入り申候、一々字引を尋、自由に尋当り不申、夫上近頃ハ書事いやになり、此状一通ニ覺て三年程寿命がちままり候様存候、夫上乍存常々先生様初御社中様一統ニ御不沙汰仕候間、此義貴公様方御断御頼上候、以上

七月七日
吉田甚兵衛様
御都講中様

中沢道二

右先生様方、前仁徳時蒙玉
來極く難く蒙玉、夫上近頃ハ書
事難く、今又此様之御仁徳、
是より尚秋九月以前様玄養様
上京被成候事、甚細く御事、
一此状貴公様初時習舎御都講様
御覧入被下候様、此義乍御世話
御頼上候、吉井様・上原又兵衛
様江茂別紙上度候へ共、此状一
通ニ甚困入り申候、一々字引を
尋、自由に尋当り不申、夫上近
頃ハ書事いやになり、此状一通
ニ覺て三年程寿命がちままり
候様存候、夫上乍存常々先生
様初御社中様一統ニ御不沙
汰仕候間、此義貴公様方御断
御頼上候、以上

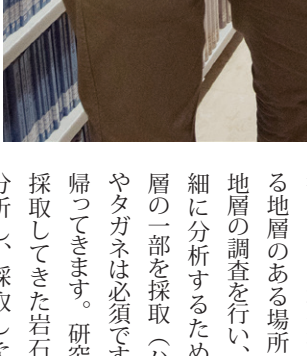
七月七日
吉田甚兵衛様
御都講中様

（寛政10年）7月7日付 中沢道二書状

学生時代の図書館の書庫での時を忘れた文献検索は今思えば至福の時間でした。今回は私の学生時代の研究と図書館との関係を振り返っていきます。

私が学生時代に研究していた学問は、「地学」です。

地学には主に地べた系の地質学、宇宙対象の天文学、大気圏内の気象学などの分野があります。私が専門としていたのは地質学です。地学は宇宙の始まりの約138億年前からその領域に含みますが、地質学となると地球誕生の46億年前から現在までがその対象です。時間



地質的な特性や地史を明らかにしていきます。

研究ではフィールド調査を行います。研究対象とする地層のある場所に赴き、地層の調査を行い、より詳細に分析するために、地層の一部を採取（ハンマーやタガネは必須です）して帰ってきます。研究室では採取してきた岩石試料を分析し、採取した地点の

学部生時代は火成岩の岩脈、特に石英の岩脈をひたすらフィールドワークで調べていました。兵庫県猪名川町の多田銀山（ここは豊臣秀吉が大規

模に採掘していたことでも有名です。〕では、いわゆる鉱脈として発達していた石英岩脈を調査・採取・分析を行いました。一人で現地へ赴き、山に入り、岩脈を探し出し、調査していました。ペグマタイトを含む花崗岩体へも赴きました。ひたすら歩き続け、探し続けた記憶があります。何度も現地へ赴き調査と採取を繰り返しました。ここで、1回の実験や調査で上手いかわないことがあたり前であり、何度も何度も繰り返し実験や観察、調査を実施していく必要性を認識したのです。

石英岩脈を調査し、試料を採取し、石英（結晶してできている水晶の小さな粒の）中に含まれている流体包有物について調べていました。流体包有物はその鉱物（ここでは石英）ができたときの温度条件を示していると考えられています。この研究は石英岩脈の生成過程について明らかにしていくことにつながっていました。この分析過程では、自身で研究方法を工夫し、必要なデータを得る重要性を学びました。



あるのか、鉱山採掘の歴史、鉱山を形成する地質学的特質、ペグマタイトが発達する花崗岩体の場所、現地の地質はどのようなものかといったことなどは文献調査が大切になってきます（この際の

地質図および図幅解説書は必須のものです。研究

室にも文献はある程度ありますが、大学の図書館ではこれらの資料が広く深くそして数多くそろっています。入念な下調べをしておくことも効率の良い現地調査を行うには必要なことです。当時は現在のようなネットを介した文献検索のシステムもなく、大学図書館が頼れる学術情報源でした。図書館の専門分野の棚の本だけでなく、書庫に入り必要な文献を探し出すまでもなく、こもりつきりで文献を調べていました。時には閉館時間に気づかないこともありました。現地の詳細情報が図書館になくとも、現地図書館などにある可能性があります。その時には、現地自治体の図書館が有効活用できます。現地の役所では詳細な地図や資料を提示されることもあり大変助かりました。フィールド調査がメインの研究ですが、図書館での調査・学習はとても重要なことであり、多くの時間を文献調査に費やしました。

大学院生時代は主に堆積岩の地層中に発達する
 碎屑岩脈を調査研究していました。対象とした碎
 屑岩脈（砂岩や泥岩の岩脈）は、大昔の地震によつ
 てできたと考えられており、地震の際の液化化に
 伴つて起こる噴砂現象と関連して考えられ、過去
 の地震の痕跡と捉えることができます。

研究対象としたのは、和歌山県南紀田辺層群（約1500万年前の地層）に卓越する砂岩・泥岩岩脈です。特に白浜町市江崎付近の磯場をひたすら調査をしていました。岩脈の調査は、海岸の磯の崖壁沿いを歩いて行きます。時には磯の崖を登つ

たり下りたり、入江をザブザブと渡ったりしながら調査していました。調査は岩脈を見つけて終わりというわけではありません。何本も何本も岩脈を追いかけて、調査・記載し、分析対象とする岩脈を絞り込んでいきます。1度調査となれば、3泊4日か4泊5日車の中で寝泊まりをしながら、携帯コンロでご飯を自炊し、お風呂は近くの温泉に入るといふ調査でした。

分析する岩脈を決めると、地層として出現している岩脈の下部から上部にかけて、岩石のサンプル試料を採取します。ただし、岩石のサンプル試料は重いので、回収するのは帰り道に行います。調査は一人で行っているため、磯場の崖からの滑落は絶対に避けなければなりません。危険も伴いますが現地調査はデータを取得するための第一歩です。ここで粘り強く着実に正確な調査の必要性を身に着けました。

調査地域の詳細な地図は国土地理院地図の2万5千分の1では不十分です。そこで現地の役所を訪ね、研究目的、調査概要を説明すると、林業担当部署等が作成している自治体の詳細地図を紹介してもらえました。5千分の1や2500分の1の縮尺であり、詳細な調査をするには十分な地形情報が記載されています。この時、現地での情報収集の可能性と交流の必要性を実感しました。

現地での調査を終えて研究室にサンプル試料を持ち帰ってくると今度は岩石試料の詳細な分析を行います。岩石カッターと呼ばれるダイヤモンドの歯がついたカッターでサンプル試料を切断し、顕微鏡下で粒子の配列を分析しました。学部時代

の石英はとっても硬く数回切断しているとカッターの切れ味が落ちたものですが、砂岩は石英に比べると格段に柔らかい（といっても1500万年前の岩石です）ので石としては十分に硬い。ため、どんどん切断していくことができます。研磨には、カーボランダムという硬度の高い研磨剤を用いて、番手をだんだん細かくしていき、表面がピカピカになるまで手作業で磨き上げていきます。ここから、やっと得られたデータの分析と考察を行っていきます。

たびたび現地調査へ出られるわけではありません。また、研究を進めるには先行研究や類似の研究動向を把握することは欠かせません。そのために私がよく行っていたのが図書館の書庫です。広大なスペースに文献がぎっしりと収まって



からも邪魔される事はありません。研究室では誰から話しかけられたり仕事をもちかけられたりということがありますが、書庫では1人だけでじっくりと集中して文献を読み進めることができます。佛教大学の集密書庫にも多くの本や1300種を超える雑誌がぎっしりと並んでいます。研究者にとっては、必要な学術情報に当たることができる上、研究のことだけを考えていられる幸せな空間であることに今も昔も違いはありません。

学生時代、研究のことだ

けを考えると、研究のためにいくらでも時間を費やすことができた幸せな時期でした。

大学院修士課程修了後、中学校理科教員として就職しました。地質学をベースに、生徒に地学を身近なものとして捉え、学習を生活に関連させていく方法を考えていました。この時から、私の

研究領域は理科教育学となります。科学を分かった気になっている子どもたちに、正しい科学概念を持たせるにはどういった授業をすればよいのか、という視点から研究を行っています。例えば「砂浜の砂は川にある石が運ばれていく間に削られてできる。」「ダンゴムシの絵を描くと足をとにかくたくさん描く。」「食塩を溶かして密閉容器で1か月おくと液の下の方が濃くなる。」「密閉容器でろうそくを燃やすとやがて消えるがその容器の中には酸素がなくなっている。」「これらのどれもが誤った解釈です。子どもたちが正しい科学概念をもつことができる授業を構築するための学習方法を研究しているのです。

2000年代後半に大学院の博士課程に社会人入学しました。ここでの研究を進めるにあたり20年前との最大の違いは、図書館の検索機能でした。ChiiとScopusは私にとって大変画期的でした。図書館に行かなくても文献を検索したり、読んだりすることが出来ます。文献取り寄せを依頼しな

くても、文献を入手し読むことができます。何よりも海外の文献がすぐにPDFファイルとして読むことができる、これは私にとって衝撃的でした。おかげで先行研究や研究の背景を知るための文献収集をとてスムーズに行うことができました。社会人という時間的制約の中で、大きな効果をもたらしました。従来の図書館の機能に加え、これらの新しい検索システムにも助けられ、理科教育学の学問領域の中で、研究を重ね何とか博士論文を書き上げることができました。博士課程での研究は、修士課程までの地質学や野外調査研究ではなく、中学校における理科の授業改善に直接に関係する内容です。教える側が準備した問題ではなく、問題を学習者が自ら学習したことをもとに作成し、学習者同士で問題を解きあい、解説しあうという授業を通して、理科学習におけるやりがいの向上や思考力の向上といった効果があることを実証していきました。

現在、ゼミの指導において、科学の方法につい

て学生に伝えています。特に自分の研究を過去の先達の研究のどこに位置づけるのか、何のために行うのか、どのような背景があるのか、自分の研究の新しい価値付けはどのようになるのか、ということについてしっかりと考えていくように指導しています。その際、強く説いているのが図書館利用の必要性です。佛教大学の図書館にはBIRDというオリジナルで使い勝手の良い検索窓口があります。ゼミでは、「まずはBIRD」を合言葉に文献を検索し、実際に図書館へと向かいます。たくさん本の手に取り、さらに必要な文献を見つけていきます。幸い佛教大学図書館ではScopusやScienceDirectも導入されており、海外の文献も容易に検索でき、DOIをもとにPDFデータを参照することができます。Scopusの導入で抄録・引用文献をどんどん手繰れるようになったことは喜ばしい限りです。研究する楽しさ、没頭できる時間の贅沢さ、それに図書館という誰にも邪魔されない学習空間といった、至福のひとつを大切にしてもらいたいと願っています。



ひらたとよせい
平田豊誠
教育学部教育学科准教授

1997年大阪教育大学大学院教育学研究科修士課程修了、大阪府公立中学校教諭、大阪教育大学附属池田中学校教諭、主幹教諭、教育委員会指導主事を経て佛教大学へ。2012年兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士課程単位取得退学、博士（学校教育学）。研究分野は理科教育学、地学教育。著書に『子どもが問題をつくり合い答え合う授業ー理科における作問指導を通した思考力育成と評価に関する実践的研究ー』（溪水社 2015年4月）、論文等に「理科授業における学習者によるオープンエンド型の作問指導を通した授業の開発ー学習者自身の学習効果感と学習効果ー」（理科教育研究、Vol.52, No.2, 2011.11、日本理科教育学会）などがある。

図書館活用法

仏教辞典の使い方

仏教学部仏教学科教授

松永知海

1. はじめに

佛教大学附属図書館には100万冊以上の蔵書があるが、その基本は7学部14学科の大学専門教育に対応した図書で、それぞれの専門教育に相応した蔵書が揃えられている。ここでは入門者のために、たくさん辞典が編纂されてきた訳を、中村元が編纂した辞典を通してみたい。

2. 仏教関係の辞典について

図書館はNDCという日本独自の十進分類法により分類整理されているが、そのラベルは3段になっており、上段は十進分類法で分けられている。ちなみに仏教関係の図書ラベルは「18」で始まる。

仏教学部には、一回生時に配付する『基礎仏教学』^{※1}という冊子があるが、内容は、

- ・基礎仏教学
- ・基礎仏教語
- ・基本仏教書

と、三部にわけて構成されている。「基本仏教書」の中の仏教辞典類には約80種の書名を載せている。なぜこのように多数の辞典類が編纂されたのかというと、編纂の意図がそれぞれ違っていることにある。

たとえば、仏教研究者で知らない人はいない中村

元（1912―1999）の編纂にかかる六種の辞典をみてみよう。

- (1)『佛教語邦譯辭典』1948年刊。仏教者は仏教語を日本語として表現してこなかったという視点で編纂されており、日本の古典の中から仏教語に邦語で、仮名をふつてあるものや、邦語で解釈してあるものから集録している。
- (2)『新・佛教辞典』初版1962年、第三版2006年刊。仏教知識に対する時代的要求に応える視点から、現代生活に関係深い事項や中高の歴史・国語の教科書に出てくる用語などを平易明快な表現で記述している。
- (3)『佛教語大辞典』全3冊（別巻索引含む）。1975年刊。解釈例は(1)の辞典をもとに、解釈をわかり易く、できる限り出典を明示している。縮刷版では、誤植を訂正し、補正を付記している。
- (4)『図説佛教語大辞典』1988年刊。従来の辞典は「ことば」を用いて仏教語を説明しているが、「ことば」とそれを指す実物（遺跡・遺品・彫刻・絵画など）とのずれ（偏差）を補正するために編纂したもので、図説の掲載図書を明記している。
- (5)『岩波 仏教辞典』初版1989年刊。日本人の生活の中に深く入り込んだ仏教を、見直す意図をもって、岩波書店刊行の『日本古典文学大系』全100巻、『日本思想大系』全67巻を中心に用語

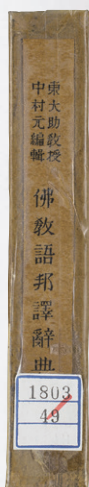
を採録している。編者には田村芳朗・福永光司・今野達氏の4氏で、第二版（2002年）には末本文美士氏が加わり、より現代人にわかり易い編集をしている。

(6)『広説佛教語大辞典』全4冊（別巻索引含む）。2001年6月刊。(3)の辞典の改訂版であり、著者は刊行の2年前に亡くなっているが、この書名はその遺志であったという。この辞典は(3)の「刊行後まもなく改訂に向けてのカード作りを開始され」といい、「厳密な学問的背骨を得てできる限りわかりやすくすることに最後まで腐心されていたこと」を記している。

さて、(1)、(3)、(5)は増補改訂をした一般的な辞典とみれば、(2)は中高生にも対応した編集、(4)は一般読者にも専門研究者にも役立つ編集、(6)は学問的に厳密な考証と現代人に向けたわかりやすさを目指した編集といえる。

たとえば、「極楽」を引いてその解説を比べてみよう。

(2)の『新・佛教辞典』では、
「くらくく」〔極楽〕〔梵〕スクワーヴァアティー（Sukhavati）の訳 阿弥陀仏の浄土で、安養浄土・安樂国などともいう。西の方、十万億の仏土を過ぎた彼方にあるという。阿弥陀経にはこの浄土の姿を細説するが、いまもなお阿弥陀仏はここにあつて説法するという。この国に生れるひとは様々な楽しみを受けるといわれ、たとえば身に仏の如き三十二相や神通を得、五官の対象はすべて微妙で心よく、心のままに法を聞き、仏に供養し、さとりがひらけるといわれ



佛教語邦譯辭典 (1)



新・佛教辞典 (2)



佛教語大辞典 (3)



図説佛教語大辞典 (4)



岩波 仏教辞典第2版
増訂改補 (5)



広説佛教語大辞典 (6)

る。ただこの浄土には辺地へんじ・疑城・胎宮たいぐなどといわれるはずがあつて、弥陀の救いに疑惑をいだくものがここに生れるという。と解説する。

(4)の『図説佛教語大辞典』では、
「極楽」くくらくく〔四一四・四 西方、十万億（あるいは百万億）の仏国土を過ぎたかなたにある阿弥陀仏の浄土。安養、安樂（国）、蓮華蔵世界、密厳国などとも呼ばれる。後世、我が国では、極楽浄土と呼ばれ、浄土という極楽を指すとして一般に考えられるに至った。極楽の原語はスクーヴァアティー（Sukhavati）で、「幸ある所」



2015年4月刊 改訂増補第9版
B6版 ※1



新纂浄土宗大辞典
※4



禪學大辭典
※3



望月佛教大辭典 再版 増訂版
昭和49年刊 ※2

心の浄土、己心の弥陀」と浄土を解説するが、『新纂浄土宗大辞典』^{※4}では「極楽は来世に往生する仏国土であるが、『無量寿経』等では凡夫の往生が可能であり、世親の『往生論』では菩薩のみの往生が説かれる。それをめぐって中国、日本では阿弥陀仏の極楽について凡夫往生が可能か否かで説が分かれる。」と解説する。そうした各宗辞典では、一般の仏教辞

(5)の『岩波 仏教辞典』では、
極楽ごくらく[s: Sukhavati] サンスクリット語は、楽のあるところという意味で、阿弥陀仏の住する世界をさす。〈極楽世界〉〈極楽国土〉ともいう。漢訳仏典では〈須摩題〉〈須呵摩提〉などという音写語や、〈安楽〉〈安養〉という訳語も用いられている。漢語の〈極楽〉は中国古典では枚乗の『上書諫呉王』（『文選』39）などに「この上ない楽しみ」という意味で、また班固の『西都賦』などに「楽しみを極める」という意味で見え、さらに『淮南子』原道訓には「至

という意味である。西欧の学者の中には、阿弥陀仏の起源をペルシアの太陽神に求める説があり、従って極楽もゾロアスター教起源であるとする考えもあるが、必ずしも学問的に根拠はない。また、「エデンの園」に極楽の起源を求め、極楽は西方における大砂漠のかたにあるオアシスを宗教的に昇華せしめたものとする説もある。また、ヒンドゥー教や仏教の文献に極楽の観念と相通する種々の記述がみられることから、極楽の起源をインドの内部、あるいは仏教の内部に求める説もあり、こちらの方がより有力である。

図⑤（4）所収）は、極楽図（敦煌〈WOB

2-VI-VI〉。インドには極楽の絵は残っていない。敦煌には幾つも描かれている。ラマ教でも

極楽世界曼荼羅がある（CB.961）。日本では当麻曼荼羅図など多数つくられたが、主なものは『極楽絵』に集録されている」

と解説している。

極の楽しみ」という語が出てくるが、仏典では鳩摩羅什訳の阿弥陀経に用いられたのが初出である。

極楽世界を説く代表的経典は浄土三部経であるが、その一つの阿弥陀経によると「これより西方十万億の仏土を過ぎて世界あり、名づけて極楽という」と述べ、この極楽世界の楽に満ちた光景を描写している。無量寿経になると、その描写はいっそう詳しく説かれているが、これは大乘仏教一般において〈国土を浄める〉という菩薩道の実践によって実現される〈浄土〉の観念を有形的・具象的に表現したものであり、仏の悟りの世界をあらわしたものと考えられる。極楽浄土は、法蔵比丘（法蔵菩薩）が四十八願を成就して阿弥陀仏となり完成した浄土である。中国・日本では阿弥陀仏の浄土が他の仏の浄土にくらべて盛んに信仰の対象とされたため、〈浄土〉といえは阿弥陀仏の極楽をさす用法が定着するようになり、〈極楽浄土〉という語も広く流布するにいたった。また、弥勒菩薩の住する兜率浄土〈兜率天〉と極楽浄土の優劣論が起り、全体としては極楽浄土の優越性が認められるようになった。↓浄土

「大徳西面して端座し、ころよくみまかりき、定めて知りぬ。必ず極楽浄土に生れしことを」（霊異記上22）「今は阿弥陀仏を心にかけて奉りて、とく死にて極楽に参らむことをのみ思ひ侍りて」（成尋母集（第二版、ふりがなは省略）と解説している。

(2)では、弥陀の救いに疑惑をいだくものは極楽の

典では読み取れなかった経典に説かれる「極楽」を心の中存在として認めるのか、往生する処として認めていくのか、という宗派間や祖師たちの見解の相違もあり、一つの辞典では専門的知識の要求には当然応えられないという事になる。ちなみに浄土宗では、凡夫が報土に生まれるという立場をとっている。

辞典類を大別すると一般の仏教辞典類と、各宗派の編纂による辞典類、宗祖辞典や固有名詞辞典・仏教医学辞典・仏教植物辞典などのテーマ別の辞典類に三分できる。どの辞典をどう使うかは、調べようとする者の目的による。図書館3階の辞書・事典コーナーで「ことば」の探究をして、種類とその特徴とを把握して欲しい。

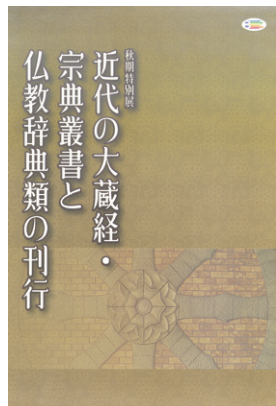
参考文献

『近代の大蔵経・宗典叢書と仏教辞書類の刊行』^{※5} 佛教学部仏教文化ミュージアム、2016年10月刊。
『基礎仏教学』佛教学部編、2015年4月刊。
梶浦晋「近代における大蔵経の編纂」（佛教学部図書館報『常照』第51号）2002年3月刊。
末木文美士「大蔵経と辞書の編纂」（『日本仏教思想史論考』所収、大蔵出版）1993年4月刊。
石上善應「仏教の辞典」（『大正大学学報』21号）1963年7月刊。

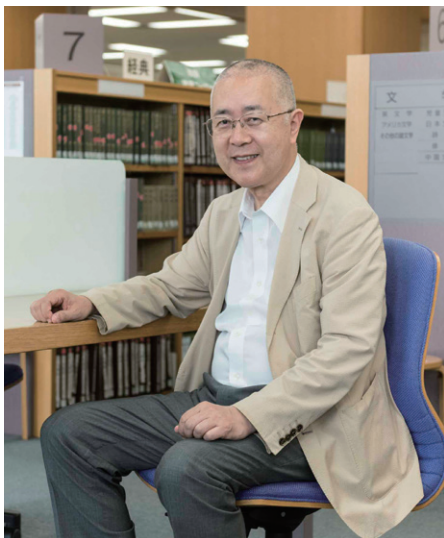
辺地に往生することに、言及している。(4)では、阿弥陀仏の起源の諸説に言及し、さらに極楽図を収録している。(5)では、漢訳仏典の音写語や漢語での極楽の解説をして、中国・日本での用例を載せている。このように、同じことばでも3種の辞典の特徴が表れていて、使う人の知的要求や理解力によって使う辞典が違ってくるのが理解できるであろう。

3. おわりに

このほかに、『望月佛教大辞典』^{※2}の「極楽」の項では、出典や原文を明記して、さらに宗派による理解の相違を詳説している。こうした相違については、各宗で編纂した辞典が有用であり、『禪學大辞典』^{※3}で「唯



2016年10月刊 A4版 ※5



まつながちかい
松永知海
仏教学部仏教科教授
仏教学部長

研究分野は、日本近世大蔵経出版史、日本近世浄土宗研究。著書・論文等に『高麗大蔵経の研究』共編（平成18年3月刊 韓国東国大学校出版部）、『全蔵漸請千字文朱点』簿による『黄檗版大蔵経』流布の調査報告書（平成20年3月刊 佛教学部アジア宗教文化情報研究所）、「後水尾法皇下賜正明寺蔵初刷『黄檗版大蔵経』目録」編著（平成16年12月刊 佛教学部総合研究所研究報告書別冊）などがある。

「情報」の収集と発信

―資料の新規購入と蔵書構築―

図書館専門員 志麻克史

佛教大学附属図書館は2017年3月31日現在、約102万6千冊の図書、約1万3千タイトルの雑誌を所蔵している。図書については、近年、年間2万点前後の資料を新たに所蔵に加えており、雑誌についても週刊・月刊・年刊など刊行頻度に差異はあるものの、1万3千タイトルの新規雑誌を継続して毎年一定量を所蔵するに至っている。ところで、昨今の「技術の

に及ぶ様々な「情報」を得ることが出来る。しかしながらその一方で、紙媒体資料も年間2万点余りを新たに収蔵し、100万冊超の所蔵を有していることも当館の実像である。ここでは紙媒体資料に焦点をあて、ここ数年で新たに収蔵した図書資料を紹介したい。

参考図書の刷新・充実

著しい進歩・発展により、紙媒体の図書・雑誌やCD・DVD等の視聴覚資料以外の、インターネット上で提供されるデータベースなどの電子媒体資料も図書館が扱う「情報」となっている。確かに「技術が図書館環境に影響を及ぼしていることは論を俟たないところであり、当館においてもポータルサイト「BIRD」で約36万冊の電子書籍、3万5千タイトルの電子ジャーナルの閲覧が可能であり、また各種データベースを駆使することにより、実に7億件

佛教大学附属図書館では例年、佛教大学教育後援会から援助金を頂戴し、図書館資料整備に充てている。2015年度はその一部を用いて参考図書(辞書・辞典類)の刷新・充実を図った。日本語に関する参考図書のうち、古語辞典や漢和辞典については新たな語句や意味・解釈が大幅に追加されたり、修正されたりすることは少ないと思われるが、現代国語については文字通り「現代」という時流によって新たな価値が付与され、「国語」として辞典に掲

載される言葉が生成されている。またすでに掲載されている語句に対しても、実社会で使用されていく過程で新たな意味が加わるといった事象も少なくない。外国語の辞典類についても、上述のような動きをふまえて見直され、改訂・増補が定期的になされている。これら新たな「情報」についても図書館として収集し、提供しなければならぬという考えのもと、所蔵している参考図書の状況を精査し、蔵書の再構築を試みた。

当館ではこれまで2階と3階の閲覧室にそれぞれの分野(2階は主に社会科学系と自然科学系、3階は主に人文科学系)に対応する参考図書を配架し、併せて両フロアに語学を中心とした辞典類を設置しているのみで、1階と4階には基本的な語学の辞典すら設置されていなかった。通学課程の定期試験期間や通信教育課程のスクーリング開講期間には、全館を通して利用者が学



辞書・辞典類

「岩波ブックレット」シリーズの整備

習する姿が多く見受けられる。これまでは1階や4階で学習する利用者が、一つの語句を調べるのにわざわざ2階もしくは3階に移動しなければならぬという極めて非効率的な状況になっていたのである。この点を反省し、この機会に1階・4階も含めた各フロアに各言語(日本語「現代語、古語、漢字」、英語「ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、韓国語」)を初めとして、各種最新版の辞典を複数冊備え、利用者の便の向上を図った。

参考図書の刷新・充実とともに、2015年度の佛教大学教育後援会援助金で「岩波ブックレット」を整備した。同シリーズについては当館で50冊ほどの所蔵を有していたが、この機会に未所蔵の既刊分780冊余りを購入、その後も図書館予算で継続購入を続け、現在に至っている。

最近では小型・軽量でいて複数の辞典のデータを網羅している電子辞書や、スマートフォンやタブレット端末のインターネットを介した辞書ツールなど、知りたい情報が容易に入手できる環境が身近となっている。しかし、これらのツールでは「辞典で調べる」ことはできても、「辞典を読む」ことは難しい。辞典を開き、目的の語句を調べるという行為に付随して、その周囲にも目を配ることにより、新たな知識や情報を得ることが「辞典を読む」ことによつて可能となるのであり、学習・研究の一層の拡大、そして深化が期待できる。利用者にはこれら刷新・充実した参考図書類を大いに活用し、自身の教養を一層高めてもらいたいと思う。

岩波ブックレットは1982年の創刊以降、様々な分野にわたって時事問題を採り上げていく小冊子シリーズである。各分野の専門家や研究者が最新の情報や研究成果をもとに分かりやすく解説しており、その読者層は学生から社会人まで幅広く、各分野の入門書としては格好の資料といえる。学士課程における学習の「入口」として、多くの利用者に手にとってもらうことを意図し、また利用者個々人が持つ各分野に対する問題関心を増幅させ、その探究心を喚起させることを期待して整備するに至った。

創刊以来、毎月継続して刊行され、まもなく1,000タイトルに迫ろうとしている同シリーズであるが、今年で創刊35年という歴史を有しているが故に、その時代その時代にどのようなこ

とが社会の関心事となっていたかを既刊分を通覧することで知ることができる。まさに「時代を映す鏡」としての性格を多分に有している点が興味深い。2011年3月11日に発生した東日本大震災。この未曾有の災害以降、同シリーズでは「防災」「減災」「津波「原発」といった主題のものが現在に至るまで断続的に刊行されている。このうち「原発」については、1986年4月に発生したチェルノブイリ原発事故後の同年12月に「原発事故―日本では?」(高木仁三郎著)が、さらに事故後10年の節目となる1996年3月には「チェルノブイリから何を学んだか」(佐藤幸男、和田あき子共著)が刊行されている。また、最近話題となった共謀罪について、本年5月に「共謀罪の何が問題か」(高山佳奈子著)が刊行されたが、2006年10月にも「共謀罪とは何か」(海渡雄一、保坂展人共著)が刊行されている。「一見すると「原発」「共謀罪」という同じ主題の著作とみなされるが、刊行当時の時代背景を念頭に置いた場合、そこには異なる問題意識が存在していることが分かる。それら



「岩波ブックレット」シリーズ

を見極めることで、過去に学び、現在を考え、未来に繋げるという学問本来のあり方を確認することができる。自分たちは先人のどのような「経験」を未来に向けて共有すべきなのかを考えるうえで、同シリーズは多くのヒントを与えてくれるものといえる。

実習用教材資料（絵本）の収集

2015年度より当館では絵本の整備・所蔵にも重点を置いてきた。きっかけは文学部英米学科教員からの外国語の絵本（洋絵本）を所蔵してほしいとの要望であった。

2002年以降の小学校における英語教育（英語活動）の高まりを背景として、教育現場では英語に精通した教員の需要が徐々に増加してきている。英語学・英米文学等を専攻した学生が小学校英語教諭として教鞭をとる姿が想起されるが、その前提として教職課程における教育実習の場での英語教育の実践が必要になる。その際に使用する教材として洋絵本が注目されたのである。

2015年度後半以降、図書館見計らい選定に取引書店より洋絵本を搬入してもらい、英米学科選書委員に選

定して頂き、徐々に蔵書を増加、構築していった。他方、日本の絵本についても保育園・幼稚園・小学校での読み聞かせ等、教育学部や社会福祉学部の学生の多くが卒業後に従事するであろう職種においても、絵本の存在は重要な位置を占めている。また、保健医療技術学部看護学科の実習の場においても、小児病棟などで子供達に向けて絵本の読み聞かせを行うなど、絵本の需要は学部を問わず、高いものがある。以上のことから洋絵本と並行して日本の絵本も積極的に所蔵を増やしていった。その結果、それまで400冊ほど、しかもそのほとんどが日本の絵本であったのが、2017年6月30日現在、949冊（うち洋絵本は266冊）の所蔵を有するに至った。読み聞かせには極めて有用な「big book（大型絵本）」や、開くと折り畳まれていた建物や人物・動物等が飛び出してくる「pop up book（しかけ絵本）」、また原書が洋書の絵本に対する日本語訳の同書を対にして収蔵するなど、様々な形態の絵本を揃え、各種実習に対応できるように便を図った。

ある程度の所蔵を備えたのを受けて2016年夏以降、図書館1階の新着コーナー前に展示エリアを設置して絵

本を並べたところ、次々に利用者が手に取り、内容を見定めてカウンターで貸出手続きを行う姿を頻繁に見かけた。2016年1月から2017年6月までに新たに収蔵した絵本552冊（うち洋絵本は263冊）に対し、実に全体の7割に迫る371冊に貸出履歴が確認されている。このうち5回以上借り出されたものが63冊、10回以上も3冊あった。洋絵本の利用も活発で、当該期収蔵263冊ののべ貸出回数は592回を数える。この数字は263冊すべてが2回以上借り出された計算になる。新規収蔵資料がわずか1年半の間にかかる利用状況になるのは極めて異例であり、絵本の需要が高いことを改めて確認させられるものであった。

借り出されると展示エリアに空きスペースができ、その場所に新たに絵本を並べるのであるが、それもまた借り出されるといった状況が頻発し、同スペースのケアにあたる時間が増えていった。尤も、収蔵資料が頻繁に利用されるのが図書館の理想的かつ本来的なあり方と考え



二条図書室 絵本展示



紫野キャンパス
図書館1階 絵本展示

る。収蔵した資料が文字通り「収蔵」したままでは意味がない。「展示」は図書館が新たに収集した「情報」を発信する一つの手段に過ぎず、決して「展示すること」が目的であってはならない。書架に見栄えよく整然と展示された図書を眺めるだけでは「情報」は得られず、「知識」は備わらない。当然「知恵」も生まれてはこない。活発な図書館資料の利用、それを促進するための展示でなければ意味はないのである。この

度の絵本の展示は、まさに利用者に絵本の「情報」を効率的に伝えるうえで最良の方法であり、それを受けて利用者には大いに活用されている。学生のみならず、本学専任教員や非常勤講師の貸出も多く見受けられ、学習・研究・教育に資していることが実感できた。図書館員としては嬉しい限りである。

視聴覚資料の購入

最後に図書資料ではないが、2016年度の佛教大学教育後援会援助金で整備した視聴覚資料「ナショナルジオグラフィックライブラリーDVDセット」（第1期～第10期）について紹介したい。米国ワシントンに本部を置く科学・教育団体ナショナルジオグラフィック協

会が制作した同シリーズは、地球の森羅万象を捉えた圧倒的な映像がその特徴となっている。地球上に存在する様々な歴史ミステリーから宇宙のロマン、生き物たちの知られざる姿や最先端科学の成果に至るまで、あらゆるジャンルの貴重な映像を収録している。その分野は人文科学・社会科学・自然科学など多岐にわたり、映像を駆使して各分野の知的好奇心を刺激する。

当館ではこれまで仏教・歴史・教育・社会福祉といった特定の分野に関する視聴覚資料は多く所蔵していたが、様々な分野を網羅したシリーズの所蔵はなかった。その意味で「ナショナルジオグラフィックライブラリーDVDセット」は画期的なシリーズといえる。利用者が同シリーズを視聴することによって、前述した岩波ブックレット同様、各分野への問題関心を一層増幅させてくれることを期待したい。

以上、近年新たに所蔵した資料を紹介した。研究機関の「頭脳」として大学図書館を位置づけた場合、設置学部・学科に関連する専門書を所蔵し、利用者に提供することは言うまでもないが、他方、高等教育機関の附置機関としての性格に鑑みた時、4年間の学士課程

において実社会で通用する「知恵」を備えるために必要な「知識」を蓄えることが必須となる。物事を多角的に解析するためには、それらに関する様々なジャンルについて「情報」を得ることが必要であり、その手助けを行えるのがほかならない大学図書館といえよう。したがって大学図書館に求められるのは専門的研究を行なううえで必要な「情報」の収集・発信の一方で、実社会で即戦力になりうる人材が備えるべき幅広い見識、それを養う「情報」の収集・発信も不可欠となる。

専門的「情報」の収集については図書館員のみ力量には限界があり、教員の助言が必要となる。教員と連携した質の高い蔵書構築を目指したいと思う。他方、一般教養や時事問題等の「情報」については、常に「今」を意識し、今、社会では何が問題とされているのか。それをふまえて今、利用者にはどのような「情報」を提供すべきなのか。また、今、利用者はどのような「情報」を欲しているのか。常に新しい「情報」を収集し、且つそれらを発信し続ける運動体である図書館の質的低下を来たすことのないよう、「今」を意識することとを念頭に今後も蔵書構築を行なっていくかと思う。



ナショナルジオグラフィックライブラリー
DVD セット

2016年度

4月 学術情報検索BRDの利用説明会を開催（2016年12月）。
 7～3月 企画展示（図書館1階）日本および海外の絵本。
 9月 佛教大学教育後援会の援助金によりDVD「ナショナルジオグラフィックライブラリー」を整備。
 10月 図書館報『常照』第63号を発行。

中央展示テーマ（2016年4月～2017年3月）

4月 2015年度新収資料展（京都編）
 5月 葵祭
 6月 宗門改帳
 7月 祇園祭
 8月 仙洞御所図
 9月 内裏図
 10月 江戸時代の活字本
 11月 京の紅葉
 12月 暦
 1月 歌会始
 2月 配陣図
 3月 選択本願念仏集



2017年度

4月 学術情報検索BRDの利用説明会を開催（2018年1月）。
 4月～ 企画展示（図書館1階）日本および海外の絵本。
 7月 エルゼビアジャパン社による「Scopus」（2017年度新規導入）利用説明会を開催。

中央展示テーマ（2017年4月～9月）

4月 2016年度新収資料展
 5月 京のガイドマップ
 6月 京都と火災
 7月 幕末維新期の京都
 8月 四条河原
 9月 重陽の節句



佛教大学附属図書館の沿革と「成徳常照館」の由来

佛教大学附属図書館は、佛教大学の前身佛教専門学校があった京都市左京区鹿ヶ谷の地から、現在の京都市北区紫野に移転した1934（昭和9）年11月23日に木造2階建の閲覧室と、鉄筋コンクリート3階建の書庫を竣工落成しました。この図書館建設にあたっては、佛教専門学校初代校長である土川善濃師（浄土宗大本山知恩寺68世住職）に深く帰依された篤志家土村常治郎氏のご遺族から多額の寄付をいただき、完成することができました。その後、1963（昭和38）年9月に開学50周年を記念して閲覧室、書庫などが増築され、1972（昭和47）年4月には、開学60周年記念事業として地上5階地下1階建て、研究室を配置した複合図書館棟が完成しました。現在の図書館は、開学80周年の記念事業として、同窓会、鷹陵同窓会などの卒業生、在学生ならび保護者、浄土宗寺院をはじめとした、本学有縁の方々からの多大な寄付によって、1995（平成7）年1月に着工し1997（平成9）年4月に竣工したものです。



す。地上5階地下2階建て100万冊を収蔵することができます。

佛教大学附属図書館の建物は、「佛教専門学校附属図書館成徳常照館之記」にある「今ココニ冠スル所ノ成徳常照館ノ名稱ハ（中略）繙書ノ士専ラ徳器ノ成就ニ努メテ智光ヲ常照スル」から「成徳常照館」と名づけられ、書物をひもとく者が努力して、立派な人格者となり、智慧の光をいつも照らすようにという願いが込められています。この本額は佛教専門学校第7代校長江藤滋英師（浄土宗大本山

善導寺61世住職）によって撰述されたもので、現在は図書館1階に掲げられています。また、同じく1階に設置されている浄土宗総本山知恩院にある八角形の経蔵「転輪蔵」（略して輪蔵）の縮小複製は、1998（平成10）年5月、図書館開館1周年を記念して、佛教大学同窓会、鷹陵同窓会、通信教育部学友会、教育振興会から寄附されました。輪蔵は、1回転させることによって、一切経を読誦したことが同じ功德を得られるといわれています。

後記

佛教大学附属図書館報『常照』第64号をお届けします。「図書館はホルモン?」。ホルモンという言葉はhormaoというギリシャ語から由来したもので、「刺激する」「興奮させる」という意味だそう。私たちの脳とところに、知性と感性に絶えず刺激を与え、栄養を供給する、そのような知的創造物・図書館。「エネルギーの供給所」を目指そう。

佛教大学附属図書館報『常照』第64号

発行日 平成29年10月23日
 発行者 佛教大学附属図書館長 松田和信
 発行所 京都市北区紫野北花ノ坊町96
 佛教大学附属図書館
 制作 株式会社栄美通信